# 早崎内湖魚類相調査

# 片岡 佳孝・太田 滋規・桑村 邦彦

# 1. 目 的

早崎ビオトープは 2001 年から湛水され、水 産試験場では 2005 年度から当水域における 魚類生息状況やニゴロブナの標識放流試験を 行ってきた。当初、早崎北区、同南区、琵琶 湖岸区(丁野木川河口右岸)の 3 ヶ所を定点 として魚類相調査を行ってきたが、南区、湖 岸区は植生の変化により小型定置網の設置が できなくなった。現在は早崎北区においての み魚類相のモニタリング調査を隔年で行って いる。

# 2. 方 法

# (1) 小型定置網による魚類相調査

2014年4月、7月、8月、12月、2015年2月に調査を行った。10月は測量のための水抜きが行われ、ほぼ干出したため定置網による調査は行わなかった。小型定置網の設置時間は原則24時間とした。大型個体は現場で測定し、小型個体は水産試験場に持ち帰り、種類分け、計数、測定を行った。

#### (2) 水質調査

早崎北区および隣接する丁野木川において 水質チェッカー(HORIBA U-10)により水質を 調査した。調査項目は、水温、溶存酸素、pH、 電導率とした。

### 3. 結果

### (1) 魚類相モニタリング調査

2014 年度の年間を通じて確認された魚種は5種(フナ類、モツゴ、タイリクバラタナゴ、ウキゴリ、カムルチー)であった(表1)。甲殻類は3種(テナガエビ、スジエビ、ヌマエビ)が確認された。個体数が多かったのは、カムルチー(632個体)、モツゴ(71個体)、フナ類(46個体)であった。特に6月調査ではカ

ムルチー稚魚が多く採捕された。2008 年以降 増加が懸念されたブルーギルは採捕されなかった。

## (2)水質調査

#### (a) 水温

早崎北区では 4 月、7 月、8 月、12 月、翌 2 月の順に 14.0  $\mathbb{C}$ 、23.3  $\mathbb{C}$ 、26.4  $\mathbb{C}$ 、0.9  $\mathbb{C}$ 、5.5  $\mathbb{C}$  と推移した。同様に丁野木川では 11  $\mathbb{C}$ 、21  $\mathbb{C}$ 、22.5  $\mathbb{C}$ 、6.0  $\mathbb{C}$ 、5.2  $\mathbb{C}$  と推移した。

#### (b)溶存酸素

早崎北区では4月、7月、8月、12月、翌2月の順に10.5mg/ $\ell$ 、2.37mg/ $\ell$ 、0.51mg/ $\ell$ 、12.22mg/ $\ell$ 、11.35mg/ $\ell$ と推移した。8月ではヒシの繁茂が著しく、水面をすべて覆う状態になった。8月の低い溶存酸素量は、この影響が大きいと考えられた。丁野木川では4月、7月、8月、12月、翌2月の順に9.50mg/ $\ell$ 、6.00mg/ $\ell$ 、8.02mg/ $\ell$ 、11.72mg/ $\ell$ 、12.07mg/ $\ell$ と推移した。早崎北区は、夏期(8月)の溶存酸素量が魚類の生息に対しての制限要因の1つと考えられる。

低酸素条件や環境変化に強いといわれる種 しか年間を通じて生息できない状態にある。 一方で、そのような環境はオオクチバス、ブ ルーギルの生息、繁殖を阻止している。

2014年10月に測量のため早崎北区の水位が下げられ、かなりの部分が干出した。干出による死亡や鳥による捕食が確認された。

表 1 調査月別の採集個体数

調査月	2014/4月	6月	7月	10月	12月	2015/2月	計
フナ成魚(ヒワラ)	5		7	ı	1	8	21
フナ稚魚 モツゴ		6	19	I			25
モツゴ	1	66	1	ı		3	71
タイリクバラタナゴ		8	2	-		1	11
ウキゴリ		1		I			1
テナガエビ		3	1	-			4
スジエビ			8	I		2	10
ヌマエビ		17		ı			17
カムルチー(成魚)	4			_		1	5
カムルチー(稚魚)		621	6	-			627
ウシガエル幼生		540	6	ı		4	550